

玉名、延岡、日向、宮崎、都城、鹿児島、国分、鹿屋、隼人、那覇(山鹿、本渡、西都、日南、串木野、西之表、石垣)

ここで取り上げられた都市には、行政的には町レベルのものも若干入っているが、いずれも近世城下町を中心として港町、宿場町、門前町などに起源をもつバラエティに富んだ歴史都市が数多く、各巻でその成立と発展について詳しく述べられている。本文の記述は、概ね都市の現状を概観した後に、古代、中世から近世、近代にいたる歴史をたどる形式をとっており、260名に及ぶ執筆陣が、それぞれに力量を発揮してまとめている。特に、城下町の絵図や町割りの地図が掲載されていたり、市街地の拡大など都市の地域変化を知ることができる地図があると、興味が湧くし理解も深まる。

第2巻以降、新たに設定されたミニツアーに関していえば、まず第3巻のみが本文で取り上げた都市についてのツアーガイドにページを割いているが、それ以外の巻では本文の都市と重複しないように、別の都市を紹介するためのミニツアーページとなっている。この間の編集上の変更については何も述べられてはいないが、数多くの都市を取り上げるには、このほうが適しているからかもしれない。しかし、歴史地理的に意義のある町並みを歩いてもらい、地域認識を深めてもらうためのミニツアーガイドであるならば、歴史の古い都市群として重要な都市を精選し、その都市のより正確で詳しいルートマップに即したきめ細かいガイドがあったほうが、読者にとって利用価値が高いのではなからうか。特に、歴史資源を活かした観光都市としての機能を強めている都市については、一層その感を強くする。実際ミニツアーのページで、このような視点から地形図にポイントを記したルートを掲載し、ルートに沿った案内をしている都市もあるのであるから、統一した形式でのミニツアーコーナーとした方がよかったのかもしれない。なお、スケールが入っていない地図が散見されるので、再販の際には訂正を御願したい。

いずれにしても、十有余年にわたって総ページ数2980ページもの叢書を編集された山田安彦・山崎謹哉両氏のご尽力は大変なものであったろうと推測される。本叢書が歴史地理学の発展のみならず、今後の歴史都市の地域振興を図る際にも、大きな役割を果たすであろうことは疑いをいれな

い。広く一般の読者にも紹介されることを望みたい。

(山村順次)

有菌正一郎著：『在来農耕の地域研究』

古今書院 1997年10月

A 5判 205ページ 5,500円(本体)

日本農業の将来を展望するために、有効な過去のデータを収集・保存することを目標とする著者が、『近世農書の地理学的研究』(1986年、古今書院)につづいて、本書を上梓された。書名に用いられている「在来農耕」とは、「全国どこでも通用する性格とその枠の中で地域固有の性格とを併せ持つて、20世紀中頃までおこなわれていた農耕のこと」である。

読みすすむにしたがって、在来農耕を担ってきた農民たちの創意工夫に富んだ農耕技術が、鮮やかによみがえってくる。1985年以降に発表された15編の論文が集成された本書ではあるが、適切な加筆・削除によって重複の部分がほとんどない。それに加えて、耕作技術や農具に関する写真や模式図も豊富に挿入されているので、たいへん読みやすい。

9章からなる本書の総論的役割をもつ部分として、「はしがき」につづき、第1章「在来農耕技術研究の視点」と、第2章「近世以降の在来農耕技術の地域性」が設けられている。第1章では、水稻耕作暦と人力犂の分析を事例として、近世以降における各地域の在来農耕技術は地域性を有するとともに、「小規模経営農家による土地および労働集約的な技術」の存続としてまとめられる普遍性をも併せもっていることが指摘されている。それゆえに、在来農耕技術を研究する際は、対象地域を構成する諸要素の中から固有の特徴を地域性として説明・累積し、それとともに、各地域共通の部分も明らかにすることによって、各地域の在来農耕の全体像がみえてくるとする、著者の研究視点が明示されている。

第2章では、近世に農書類が著された11地域をとりあげ、農耕技術の地域性が実証されている。ここでは現代までの農耕技術の変化についても述べられており、早稲米の導入によって金沢平野が水田単作地域になったように、20世紀における耕地利用率の低下なども明らかにされている。

つぎの第3～7章は、在来農耕に関する実証的事例研究の部分にあたる。

第3章「岐阜県東部で使われていた人力犁の研究」と第4章「耕起具の発達過程における岐阜県的人力犁の位置付け」は、中部地方山間部の花崗岩地域を中心に使用されてきた水田耕起用の人力犁(「ひっか」・「すき」)に関する論稿である。「ひっか」型人力犁が、地域の性格を明らかにするのに格好の指標とみなせることをふまえて、その分布や形態・使用法、ならびに耕起具の発達過程におけるその位置づけなどが論じられている。

第5章「低湿地水田における冬季の高畦の研究」では、中部地方以南の河川下流域で冬季に造成された高畦について、その概要、造成手順、伝播過程、形成・存続要因などが明らかにされている。ここでは、乾土効果と凍土効果による地力向上と、裏作物の作付場の確保を目的とする冬季の高畦造りについて、濃尾平野・琵琶湖東岸平野・京都盆地南部・佐賀県白石平野の4地域を中心に個々の地域性と共通性の比較検討がなされている。その結果、高畦造りの形成要因のひとつとして、地主による奨励・強制が強調されている。

第6章「三河の農書『農業時の菜』の耕作技術の研究」では、著者みずからが翻刻・現代語訳を進めている農書『農業時の菜』の利用に関する成果である。ここでは、『農業時の菜』の著作目的、木綿に施す干鰯の施用法と『農業全書』の綿作法との関係からみた耕作技術の地域性、のちの三河農書への影響の3点について考察されている。『農業時の菜』にみえる耕作技術は、一定の収穫量を確保することに主眼を置いたものであるとする見解が提示されている。

第7章「三河国村松家『作物覚帳』の夏季畑地輪作の復原」では、三河山間部の村松家における夏季の畑作物の種類や作付配分、輪作型などが詳細に分析されている。本章では、東北日本と西南日本両方の代表的な夏季畑作物が6年周期を中心として輪作され、時代を経るにしたがって畑地利用の集約度が上昇していったことが明らかにされている。水田と比較して畑作農業の研究が遅れて

いるなかであって、貴重な成果といえよう。

そして第8章は、著書のもう1つの研究テーマといえる近世農民の日常生活に関するものである。最近、佐藤常雄ほか『貧農史観を見直す』(1995年、講談社)や、網野善彦『続・日本の歴史をよみなおす』(1996年、筑摩書房)などでは、近世の百姓像が再検討されている。このようななかであって、第8章「近世後半における百姓の米の消費量研究」は、近世の百姓が米をまったくといってよいほど食べなかったという通説の見直しにとりくんだ実証的研究である。著者は、近世後半の百姓が日常食べていた穀物総量のほぼ半分は米であったという結論を導きだしている。このことを、歴史・地理教育の関係者にとくに読んでほしいと、著者は願っているのではあるまいか。

最終の第9章「近世末の土地利用図からみた日本の環境」には、本書の結論としての役割が与えられている。本章では、文部省科学研究費重点領域研究「近代化による環境変化の地理情報システム」の一部として著者が作成した「近世末土地利用データファイル」を画像化した地図の分析がなされている。ここでは、エネルギーが地域内でほぼ循環し、人口の自己調整機能をもつ村落社会が存続していた近世末の土地利用図を、近代以降の土地利用変化の原点ではなく、近世まで蓄積されてきた土地利用の到達点の姿であると、著者は位置づけている。

本書では、豊かであったにもかかわらず忘れられつつある、地域性に富む在来農耕の技術に触れることができる。「あとがき」にある、日本農業の将来あるべき姿に関する著者の提言も意義深い。未来を見通す歴史地理学研究の貴重な成果ともいえよう。歴史地理学や農業地理学に関心のある人たちのみならず、農村地域のフィールドワーカーや、日本農業の将来について考える人たちにとっても、有益な本である。

(徳安浩明)